

「新京図書館」のライブラリアンたちの記録(一)

——『新京図書館月報』を通じて——

李 青

はじめに

今世紀に入って、旧満洲国時代の図書館館報は相次いで復刻版が出された。「満洲国」の首都であった「新京図書館月報」の館報は有志らの尽力で2009年に文圃閣より復刻版が世に送られた。75年も以前の図書館に関する記録であるが、他の図書館記録と一線を画する特別な意味を持っている。1932年から中国の東北部に建国された傀儡国家「満洲国」の首都にある図書館の記録であるがゆえに特別に貴重であるとともに、植民地統治解明にも役立つ一次資料だからである。「満洲国」に関する記録は段階を踏みながら、極秘資料を含めて、さまざまな文献の一般閲覧が可能となったり、また一部の資料は復刊されるようになった。「満洲国」の研究者にとっては、関連資料の解禁は何よりも喜ぶべき出来事である。

図書館の建設は植民地経営にとって極めて重要な一環をなしていると考えられる。図書館に関する資料やライブラリアンたちが記録した日常、彼らが生きた記事、書評、評論は紙幅の狭い館報にしか載せておらず、これまでごく少数の人の目にしか触れたことのない文書である。しかしながら、歴史を振り返ってみるまでもなく、これらの記録はまさに歴史の記録である。だからこそ、その時代の一側面が窺えるわけである。植民地の文化政策を実行する現場の事情を通じて、植民地国家「満洲国」の実態に迫り、歴史の一頁を理解することができるだろう。

「新京図書館月報」復刻版は三巻に分かれる。第一巻は12号（1937年8月）～42号（1940年6月）であるが、ただし、17号～23号は欠号である。第二巻は43号（1940年7月）～59号（1942年4月）である。第三巻は60号（1942年5

月)～76号(1944年1・2月)であるが、ただし、66号5～8/13～16頁、75号は欠号である。

本論では、第一巻の12号(1937年8月)～42号(1940年6月)に焦点を当てて、見ていきたい。現時点では1号から11号までの館報は未見であるので非常に残念なのだが、1937年12月1日に「満洲国」内の治外法権は撤廃され、南満洲鉄道株式会社(以下、満鉄という)付属地の権力を国家に引き渡した後の図書館の姿に注目したい。新京特別市図書館が新京特別市の管轄になってからである。この後の図書館のあり方、そして、そこで働いていたライブラリアンたちがいったいどのような形で図書館運営に関わったのか、何を感じ、何を書いたのかがとても興味深い。日本に現存している月報は1937年8月、すなわち12号からであるが、「満洲国」内の治外法権が撤廃される前夜から、満鉄付属地の権力を「満洲国」に引き渡した後の様子がよく現されている。

1937年とは、7月7日に盧溝橋事変が発生しており、そのまま日中全面戦争に突入した年である。一方、「満洲国」は植民地国家としての建設が急ピッチに進み、諸「法案」や制度などが日本人主導の下で完備されつつあった時期である。このような背景の下で、図書館の経営に劇的な変化が生じた。そもそも、日系の在満図書館は日露戦争後満洲の権益を確保するために設立された満鉄によって、土台を作り出されたものである。満鉄諸機関の「満洲国」への移譲にともなう満鉄沿線付属図書館の満洲国への移譲は、国家建設において、一大事のはずであろう。「満洲国」建設において、筆者の愚見では、1937年から40年あたりまでが最盛期ではないかと思われる。この点について、小論で「新京図書館月報」で活躍していたライブラリアンたちが書き残した活字と館報に寄稿された文化人たちの短文を通じて、問題の本質を突き止めてみたい。

一 ライブラリアンたちが書いた「新京図書館」

1 ライブラリアンの顔ぶれと図書館生活

新京図書館に勤めていた図書館員は、復刻版の足かけ5年間分(欠号を除く)をチェックしてみると、20数人の名前が確認できる。なかには華やかな文筆活動をしながら(例えば『作文』同人の坂井艶司はそのような一人である)図書館員として働いていた者もいれば、普通の図書館員として務めている者

もいた。彼らの経歴はすべて調べ切れていないが、一部館報に出ているライブラリアンの経歴を見る限りでは、実に多彩と言えるだろう。共通して言えるのは、一ライブラリアンとしては、本を愛し、職業意識が極めて高いことである。図書館は一般的に社会教育の機関だと位置づけられることが多いが、植民地国家「満洲国」の場合は、国家の意思をそのまま社会に発信する機関であるから、この特別な使命を負う図書館員達は重々理解していたはずであろう。文芸評論や書評、時評などを読んでも、国策に沿った発言が並べられた箇所を除けば、文章は論理性に富み、物事の見方が鋭い。「王道楽土 五族協和、日満一体」などのプロパガンダを館報に終始記したことから、日本各地から集められたライブラリアンたちは、新天地一楽園の満洲を信じ、国策を忠実に実行するという姿も浮かび上がらせている。書物の整理などの実務から、イデオロギーまで実によく訓練された素質の高い知的なチームだと言わざるを得ない。

まずは新京図書館の歴史を振り返ってみよう。

「満洲国」の図書館は前述のように満鉄の成立と共に附属施設として誕生したわけである。岡村敬二は著書『「満洲国」資料集積機関概観』のなかで満鉄のなすことについて以下のように説明している。⁽¹⁾

本業の鉄道事業のほか、炭坑や鉄鋼、各種工業や商事、保険など各分野に事業投資を行った。さらに調査研究活動をも展開し、また付属地といわれる沿線住民の広大な居住地を保持して地域の自治体組織としての役割をも果たしてきた。資料調査や読書環境整備の面でも、調査部に図書室を発足させるとともに沿線付属地に図書閲覧場を設置して沿線住民の利用に供してきた。これら図書館や閲覧場はのちに社業の図書館としての大連、奉天図書館や沿線各都市の図書館としてその活動を展開していくことになる。

図書館事業を本業以外の活動の一環としていることがわかる。「満洲国」建国前後にも、満鉄は本社の意向に沿う形で（すなわち国策に似合った形）図

(1) 岡村敬二『「満洲国」資料集積機関概観』不二出版、2004年6月、7頁。

書館事業を展開した。大連図書館の『書香』、奉天図書館は『収書月報』、ハルビンでは『北窓』などの館報の発行は事業の一つである。

新京図書館の沿革は「新京図書館月報」第16号（1937年11月）掲載の「⁽²⁾新京図書館沿革略」（p41～42）に詳しいので、簡単にまとめておきたい。

満鉄沿線に住む社員や日本人滞在者に精神的な糧を提供するために図書閲覧場を登場させた。1910年に長春に「満鉄図書閲覧場」ができた。これが新京図書館の全身であり、現在の長春図書館である。1917年「満鉄長春簡易図書館」と改名し、1922年簡易」という二文字を取り、「満鉄長春図書館」と名を改めた。1932年に満州国が成立し、国都を長春に置き、名前を新京と改めたため、同年11月に、図書館の名を満鉄新京図書館」と変更した。翌年の1933年に新京は特別市となり、図書館は「新京特別市図書館」と名乗るようになったが、管轄は依然として満鉄にあった。

1937年に「満州国」内の治外法権は撤廃され、満鉄附属地の権力を国家に引き渡した。新京特別市図書館は新京特別市立に管轄になり、1938年に新京館と合併し、「新京特別市立図書館」として、スタートを切った。

『新京図書館月報』は館報として現時点で日本において確認できた最古が第12号（1937年7月）であり、タイトルは「新京図書館 増加図書目録」である。1936年5月に創刊された。第13号から「新京図書館月報」と解題する声明を「あとがき」（p22）から確認できる。以後一貫して『新京図書館月報』と称してきた。

「新京図書館」勤務の図書館員は様々なところから集まってきたようである。確認できた範囲では、長く務めた者もいれば、比較的速く辞めた者もある。辞めた理由は一身上の都合の場合の他、軍隊への召集というケースもある。個人的な理由で辞めた場合はほとんどが復帰していないものの、軍隊へ

(2) 拙稿「『新京図書館月報』からみる〈満洲国〉時代の文化」『文藝論叢』第79号、2012年10月、144頁～145頁。

の召集はこの時期（1939年～1940年）において、近くの駐屯地で短期間の軍人生活を送ってから、図書館に戻ってくる場合が多い。前線に送られたまま戻ってこない、または戦死しまったケースは第一巻においては存在しなかった。司書係の松川幹生の例を見てみると、よくわかる。第26号（1938年10月）の館報にある「彙報」欄によると「司書係松川幹生君は、臨時召集を受け10月24日より、新站梅本本部隊に入営する」（p79頁）とある。そこで、次号の27号（1938年11月）の館報にある「彙報」欄をみると「11月23日新站梅本本部隊に入営中の松川幹生君帰館の予定」（p91）とあり、一ヶ月軍隊に召集された後、再び戻ってきたことがわかる。他にも似たようなパターンがたくさんあるが、それらは省略する。

「新京図書館」が「満洲国」へ移譲される前の1937年9月末の統計⁽³⁾によると、職員数はわずか3人であったという。筆者が見たところ、この時期の「新京図書館」館報の中に現れた職員はもう少し人数が多いように感じられる。非常勤の職員が存在があったのだろうかは定かではない。

後述部分で個別の館員を特に取り上げるので、まずここで時間順に館報に名前があった図書館員の名前を記しておく。ただし、満鉄は図書館移管前後に退職した館員の名前があったが、特に館報に書いたことのない中国人（第一巻では三人しか名前がなかった。他にもいると思われるが、館報では確認できない）を省いた。なお、図書館員の身分が確認できなかった者もいたことを断っておく。

木下助男（1933年4月～1937年11月、館長）、大野澤緑郎（ロシア語が堪能）、布村一男、山崎末次郎（1937年12月～1940年、館長）松川幹生（1939年8月からハルビン市立図書館へ転任）、加藤忍、三島雪男、向井章、免田造地、田中登（1939年10月以後転出）、田中生、菊池弘美、彌吉生、坂井艶司、石籠子、津村政雄、大島喜平、肥田豊彦（1940年辞任）、坂井生、窪川稲子、相良貢、神戸悌、野村正良、三島信子、である。

図書館員は本を相手にしており、一見して地味に感じるが、業務内容からみると、相当量の知識を有しなければならないし、世相を読みこなし、書評、評論なども執筆していた。実際に図書館員のなかには坂井艶司のよう

(3) 同(1)、9頁。

に自身が文筆家、詩人のケースもある。以下は国都「新京図書館」のライブラリアンたちが書いた「閲覧室点描」の内容を拾いながら、ライブラリアンたちが見た日常の図書館はいかなるものなのかを考察するために、彼らの喜怒哀楽の一端を理解し、当時の世相も覗いてみることにする。

29号（1939年1月）に松川幹生が「閲覧室点描（満洲一旗組之巻）（p109）」を書いている。閲覧者と出納手とのホットな話題である。閲覧者は「満洲一旗組、大きな希望を抱いて渡満した人々の踏台、多くの若者達が図書館に日参して来た」。書き手の目から見れば、ここに毎日通っている若者達は「日賃労働にあぶれた者は、アンパンを二つ持って小説と新聞を手当たり次第読み、疲れたら出納手の眼をひそんで睡るのだった。彼等は新京建設の指針であった。彼等が多く図書館の門をくぐる時は新京の建設も遅滞している時だった」と皮肉とも、ユーモアともとれるような描写から、当時の図書館にたむろしていた青年達の様態を浮かび上がらせている。彼等のことを「ルンペン」と揶揄している。「彼等是一日一日図書館で過ごす、もう毎日のように通ってきた。出納手とも顔見知り以上になると、彼等の無聊な一日を送るに図書館ほど都合の良いところはなかった。私も出納手の一人であったが、ルンペン氏とは随分心易くなって居た。時には煙草を與へ、時には一緒に南京豆を食べたりした」と述懐するところなどは、館員の閲覧者に対する親切さ、またはひょっとして一日中図書館で過ごす青年達が悩みでも抱えているのかと心配しているようで、親身になって共に煙草を吸ったり飲食をしたりする姿が、アットホームな雰囲気醸し出す図書館に感じられてならない。

さらに、この「ルンペン」と言われている一群を松川幹生の観察が言い得て妙である。社会人になって、「就職出来る男の顔には、一種の意気があった。自分を励ましているものが見えた」。逆に「就職出来ずに毎日図書館で小説を展げている男達の眼は、どんよりと濁って虚無的な暗さがあった。そんな男は出納員の親切にも無感動であった。却って反感を示すような視線を向けた」と回想する。「満洲国」建国後に「満洲国」に憧れ、押し寄せてきた青年達の成功と彷徨とを若年層の閲覧者を通じて分析しているのである。

次は30号（1939年2月）に相良貢が書いた「閲覧室点描一婦人の巻一」（p119）を見てみよう。「満洲」に渡った女性の勉学意欲や図書館利用が如何なる状況だったのかを理解するためには、この一編が特別面白い。相良貢

の紹介によると、「20人に1人の婦人閲覧者」という具合であり、「この図書館には主婦らしい閲覧者は稀だ。主に職業婦人と令嬢である。若い婦人は大抵自分で本を探し、また出納係の者に尋ねるにしても、四邊の者が顔を上げるような大聲は出さぬ。読む本も探し易い文学書だから探すに困ることもない」と述べている。これらのインテリ女性はどのような書物に興味を持ったのだろうか。相良貢は続けてこう描写している。人気があったのは「島木健作の『生活の探求』とか有名な『大地』それから丹羽文雄・横井利一の小説、もう少し上位になると、チエホフ、ストイエフスキイの類である」。インテリ婦人達は性格的にも慎ましく、読書の内容も知的だったようだ。図書館では婦人のために洋裁や家事、育児の書物を用意していたようであるが、閲覧請求者の少なさに図書館員も不思議に思っているようである。日々の観察から「新京での婦人の読物は、婦人の生活に直接必要な書籍より、趣味による小説などが多い譯である」と結論を出している。少ない女性の読者に相良貢が「まず本を手にとって呉」と呼びかけた。恐らくこれはすべてのライブラリアンたちの願いでもあるだろう。

相良貢は31号（1939年3月）にも「閲覧室点描 学生の巻き……」（p137）を書いている。年齢や学年については記載はなかったのであるが、「少年達」という言葉や借りた本の種類から推測すると、描写対象は中学生ではないかと推察される。

この号では、図書館は学生扱いの苦手なことが記されている。タイトルの「学生の巻」の出だしは「学生を如何に取扱うか—これは全国の図書館の頭痛である」と苦言を呈している。試験の前に集団で狭い図書館の閲覧室に押し寄せて、何かと騒がしい様子を詳しく紹介している。「一時に登館するし、それによる喧騒と、閲覧の乱暴さ、狭さ（読書の範囲）などが上げられる」。さらに試験の時期になると「洪水のように押し寄せて読み荒らす。（中略）ほんの一時的に五六十人の者に求められる。それが短期の現象であるから始末に困る譯である」と、相当困っている様子がかがえる。彼は新京の学生を「子供らしくない」と評価している。彼の目に映っているのは「毎日通いつめる顔見知りでも、態度が非常に事務的で、人馴れしない。これは出納係の者には却て都合の良いことでもあり。また一面嬉しからぬことでもある。」日々図書館で成長していく子供達の姿に触れて、「少々コワイような気がす

る」と、相良貢が大人しか感じられない一種の特別な感情を述べている。

学生に対しては、別の図書館員も同様に眉を顰めている。第32号（1939年4月 p155）に菊池弘美が「出納子の寝言」という題で再び中学生達の閲覧対応に困っている状況を書き残している。

「児童文庫を読むものはほんの僅かで、恋愛小説、或いは探偵小説を漁るのに驚かされる」。注意してもほとんど聞き入れてもらえず「中等学生等も参考書を探す人より、恋愛小説を求めるものが多い、〈殺人淫楽〉とか〈良人の貞操〉〈朱唇〉等々題名を選ぶ者も少なくない」と述べている。「本の番兵から、進んで社会教育に携わる、現在の図書館の悩みの一片がここにもある」という本音は、大人の図書館員の眼に映った少年達は勉強よりも快楽に憧れているのではないかという憂慮感であろう。その時代にして、特に植民地の「満洲国」において、国の将来に任せられている若者がこんなにもだらしがなく、向上心のない様子を目に余るほど日々触れる驚き、不安、いらだちを字句の間からにじみ出ていることが感じられたのである。

勉強の動機が不純な人やモラルの低い人の存在もまた図書館員を困らせた。小説を何冊も借りてわずかな時間ですぐ返却したり、本の広告やほしい頁を出納子の眼を盗んでちぎり持ち出す悪質な行為が頻発している。

本の整理や分類または研究以外に扱いにくい読者にも対応しなければならないライブラリアンたちの日々の苦労を垣間見ることができた。図書館も社会の一角を鏡のようにして様々な人間の人生模様を映し出したように思う。

図書館員という立場から坂井生が第37号（1939年10・11月 p217）の「あとがき」で図書館員のありかたについて述べている。彼は図書館員は「単なる図書の出し入れ屋ではない。最も純粋な社会的学徒であり、行動に於いては消極的ながらも、精神に於いてはより積極的なものである。〈中略〉飽くまでも図書館員は、図書館員であることを第一義とし官吏非官吏の問題は第二の問題とすべきであるのは当然なことで云わねばならない。図書館員の純粋性を、もっとも尊重する。図書館員は、万国共通の精神が在る筈である」と言う。

もう一つ筆者の目に止まったコラム「さんしょうげん」が面白い。館報のコラムは特に決まりごとがあったわけではないようである。だいたい数回続いてから、違うコラムに変わっている。「さんしょうげん」は連続シリー

ズであり、館員達のつぶやきを通じて、日々の本や雑誌に対する素直な感想、文壇の動向、時事評論など……ざっくばらんに書きたいことならば、些細なことでも気軽に書いている。狭いスペースであるが、背伸びしているライブラリアンたちの姿を浮かび上がらせている。文壇動向に対するつぶやきはかなり辛口の部分があり、彼等の洞察力の鋭さを物語っている。少し紹介したい。

第28号（1938年12月 p104）では図書館員の田中生が創刊したばかりの『満洲浪漫』について、ユーモアを交えながら、特別要望とも取れるような発言をした。「『満洲浪漫』が創刊された。誠に結構なことである。望むらくは只一高層ビルに閉籠って、土塀に眼を蔽うことのみならず。銀座の柳を新京に植替えるのみに終ることのみならず。要するに、『満洲』大地に根ざすような内容を持って、一般読者に親しみを持ってもらえるような文学にしてほしいという要望ではないだろうか。

第30号（1939年2月 p121）に日本内地文壇に現れた「大陸文学の誕生」の表現に対して「大陸の文学は大陸で……そう云う主張は満洲文人達のそれと一致してある。土地の文人たちよ、主張はこの位にして良からう。〈土に生えた文学〉の創造にかかろうじゃないか」とあり、「満洲国」文学の独自性を強調しているように見受けられる。

なお、内地人（日本国内の人）の大陸への興味本位の旅行に対して、「つまり単なるエキゾティズムのレポートには眉をしかめさせられる。大名旅行はもうお断り一と言えないものか」と批判している。

「自分の小説の批評を掲げた新聞記事を切り抜いた紳士（新京では有名な作家だが）」が館員に発見され、平謝りされる醜態を暴露している。モラルの問題を問われている一場面であろう。

第31号（1939年3月 p137）に純文学を掲げている同人雑誌『満洲浪漫』第二輯に発表された「満洲の受胎」（工清定）に厳しい指摘があった。「純文学的な香りからほど遠い大衆文学の一頁でしかない。満洲浪漫よ如何に借り物でも、あんな衣裳は着ぬがよい」と批判している。

他に新京の本屋の怠慢さ、「時流本ばかりを高々と積みあげて、知的な本の買い込み方一つ知らぬ」ところの指摘はライブラリアンの職業習慣からきた鋭さ故に、批判していると思われる。

2 ライブラリアンたちが見た「満洲国文化」

図書館員の構成はかなり幅が広いようである。満鉄が付属地を建設する際に、図書館を重要な一環として考えていた。加藤一夫等が著された『日本の植民地図書館』の紹介によると「当時、本国から公立図書館長クラスの人々が赴任し、図書館経営や整理技術の研究や各種の付帯事業において国内を凌ぐ活動を行っていた。出版物も盛んに刊行していた⁽⁴⁾」とのことであり、当然図書館員に対する要求は一定のレベルを有していることが当然だろう。当時の館長である山崎末次郎（1937年12月～1940年、館長）の経歴を見れば納得するだろう。彼は、大正10年日本大学法学部を卒業した。東洋文庫に勤務してから、営口、新京図書館長を歴任した。典型的な図書館官僚コースを歩んできたと言えよう。なかには文学者もいれば、本土日本からの派遣や「満洲国」地方にある他の満鉄図書館から移動してきた人もいる。全体的に専門知識の豊富な図書館チームである事実は、彼等が書いた専門書についての書評、文芸評論などから見て取れるのである。坂井艶司などの活躍は注目に値する。

坂井艶司は同人誌『作文』⁽⁵⁾の同人として、詩人として有名であるが、もう一つの身分は新京図書館司書だった。「満洲国」時代は大連と新京で活躍していた。彼が1939年月末に大連作文社より詩集『崖つぶちの歌』を発表し、一躍有名な詩人として知られるようになった。一ライブラリアンとしても、館報の編集に携わりながら、様々な評論を館報で披露した。ここで坂井艶司が館報における活動を見てみたいと思う。一国の首都にある図書館の司書が書いた評論は単なる個人の思想を表すばかりではなく、国の文芸政策の動向は彼等の言論から読み取ることができる。

坂井艶司は第35号（1939年2月号、p119）に「私の書庫」と題して、三年足

(4) 加藤一夫、河田いこひ、東條文規共著『日本の植民地図書館アジアにおける日本近代図書館史』、社会評論社、2005年8月、113頁。

(5) 隔月刊文芸同人誌。1932年10月～1942年12月（55輯）廃刊。大連で『文学』名で創刊、三輯（33年4月）より『作文』と改題、16輯（35年12月）のみ『一家』と改題、次輯で『作文』名に戻る。発行所を奉天に移そうとするが、当局の許可が得られず廃刊。発行人は青木実、編集人は安達義信、21輯以後は渡辺淳（秋原勝二）、55輯は小杉茂樹。当初は文学愛好家の自作発表の場ではなかったが、次第に「満洲」を意識した創作がなされるようになり、200部だった発行部数が廃刊時は2000部となるなど、「満洲」を代表する文学雑誌となった。64年に日本国内で復刊。

貴志俊彦 松重充浩 松村史紀編『20世紀満洲歴史事典』、吉川弘文館、2012年12月、300頁。

らずの図書館生活を振り返った。自分のことを「私は、ここの図書館にとっては、不当な通行人であり、盗人である」と形容し、本や仕事をこよなく愛していることを表した。以後の館報に坂井艶司の名前がしばしば登場し、書評、評論、コラム編集など多彩な活動をし、活躍ぶりを示した。文学者でもある彼はどのように「満洲文化」を考えているのか、第32号（1939年4月）に発表された「選ばれたる人々—満洲文化小論—」（p151）をみてみよう。

この論説は「満洲文化」は如何なるものなのか、どう解釈すべきか、「満洲文化」をどう発展させるか、などの問題を取り上げた。

坂井艶司は論のなかで「支那事変（1937年7月7日日中全面戦争勃発）以後にも多くの人々が渡満した。新京は、所謂〈選ばれたる人〉の溢るる巷と化しつつある」と、「満洲国」の首都「新京」に来た日本人は選ばれた人だと定義した。当時は「満洲国」の理念として「五族協和 日満同心同徳」などを宣伝し、日本国内でも大陸への憧れ、植民地の満洲に行って新天地を切り開くことが盛んであった。つまり、渡満するのは国の使命を携わり、使命感を持たなければならなかった。「ただ選ばれたる知性人が、その己が存在価値の尊さを認識する以前に、己が存在理由の歴史的必然性に就て、その認識を深めることを忘れてはならないである」と坂井艶司が新京に来ている日本人達に「満洲文化」を築き上げるにはまず自覚を持って提起している。

坂井艶司の解釈する「満洲文化」というのは「僕一個人の、或は二三の意を同じくする人々の叫びではなく、満洲在任の幾万の人々の心からなる思惟によって生まれた言葉である」と。彼は当時の東北に君臨していた張作霖の暗黒政治を批判し、張作霖を暗殺した「満洲事変」（1931年9月18日、関東軍によって張作霖が乗っていた列車を爆破した事件のこと）を積極的に評価した。「満洲文化」との関わりについて、彼は「昭和6年の満洲事変こそは、今日の満洲文化を要望させきづかせしむる一大祭典であったとも思われるのである」と言いつつ、「事変の成果に就て最も重要視すべきものは、満鉄の偉大なる献身的努力である」と満鉄の「満洲国」に貢献したことを称えた。

坂井艶司が最後に「満洲文化」について出した結論は「来満した幾人もの人々〈選ばれたる人々〉のもつ精神は、日本精神である。文化は日本文化である。勿ち、かつての大和民族が建国当初、支那文化の影響によって生長した如く満洲文化は、日本文化、日本精神によってはぐくまれ、建設さるゝ事

に敢えて不思議は無かろうと思うのである」。

坂井艶司の論点は如何にも時局を意識する考え方であろう。あくまでも支配者の「満洲国」の建設における指針に沿った論点と言えよう。「満洲文化」は「日本精神」、「日本文化」という論理で推進するならば、現地の中国伝統文化を完全に無視してしまうという結果になる。

第36号（1939年8・9月p200）にも「満洲文化論一序章一」を発表した。前回の論点とほぼ同じ論点を繰り返していたが、語気は以前よりまして激しくなった感じられる。彼は「満洲文化」を形成する唯一の歴史根拠を三段階にしている。つまり、「満洲事変」前から事変後まで、「満洲事変」より「支那事変」まで、「支那事変」から1939年までである。

満洲文学について、松川幹生が第15号（1937年10月p31～32）では「満洲文学の一考察」を発表している。

彼はこの論文では、当時新聞の学芸欄に発表された学者や評論家の論点を参考にしながら、文壇の見方などを紹介している。1937年は「満洲国」が建国して、まだ5年しか経っておらず、文芸においてはまだ成熟されていない。文壇では「大体日本内地文学の延長された模型的なものと、満洲大陸独特の匂いを持った植民地文学の二つの型が考えられる」と分析している。松川幹生は専門家の意見を以下の三つに纏められた。「1、満洲文学は日本文学の延長又は同型であるべきだ、と言うもの。2、満洲文学は満洲の土地と生活に食い込んだ独特の植民地文学でなければならぬ、と言うもの。3、1、2、何れも問題でなく、土地よりも類型的な型よりも、むしろ型を脱し土地を離れ、自由に時代に応じたものを選ぶべきだ、と言うもの」。松川幹生は日本人が当時置かれた状況を分析、「日本人のみを主として居り満洲に於ける文学の文化的使命を考察した場合、即ち文化的に満洲国人を同化しようというにはかなり満洲の土地と人に突入する文学が必要である」とし、あくまでも「満洲文学」の執行者は日本人が主とする。「土地と文学の関係から考えると満洲には満洲独特の土地文学が生るべきである」と結論づけた。

なお、「満洲国」で活躍している日本人作家、作文派の青木実、町原幸二、秋原勝二などが書いた作品を例として、「此れ等も満洲の植民地文学と言うに一寸躊躇せざるを得ないものである」とこの一派の作家がある程度作風、内容などは「満洲」化していることを示唆している。雑誌についても雑然と

しているもの、独りよがりのもの、軌を脱してるものが多いと指摘した。

最後に松川幹生は日本人作家は日本内地への感傷的な愛着を忘れ、「満洲」に根付く偉大な文学作品を誕生させるべきだと呼びかけた。

他に1939年8月9日に新任として赴任されてきた館員の津村雅雄が「満洲文学」について「満洲文学雑感」(p241~242)を書いた。新京の若手図書館員が文学に触れることは、注目すべきであろう。「満洲文学」は日本文学の延長線上にあるべきだと主張する一部の文学者と違った論点は目新しい。

「満洲文学」は「日本文学」と区別し、その独自性を主張するならば新しい道、新しい気分、新しい形式、新しいモチーフが必要である。主題もまた満洲の生活から汲み取ることが望ましい。然し必ずしも主題は生活からのみ汲み取るには及ばない。問題は主題にあるのではなくて創造的精神(満洲的、建設的気分)にあり。然し気分は思想や意志のどんな努力からも造ることが出来ない。それが発見するためには作家の心理は単に創造的であるばかりでなく、満洲的、建設的でなければならないと「満洲文学」の独自性を主張している。「満洲文壇」のジャーナリズムの未熟性から作家達の創作は同人誌に割拠し活動することを指摘した。流派、地域、主義、主張をある1カ所に限定するのは「文壇を地域的に小さく狭くした」と指摘した。それから「同人雑誌では排他的になったり、自己陶醉に陥ったりして正しいディレクタントイズムの方向にも向いていないものすらあるのである」とその限界に触れた。

二 文学者たちと「新京図書館月報」の関わり

1 大内隆雄と「満人」文学の紹介

「新京図書館月報」では、「満洲国」にいる中国人、いわば、「満人」文学者の活躍を紹介する記事は極めて少ない。図書館の図書リストにも中国語の図書はあまりなかった。「新京図書館月報」第14号(1937年9月p23)に館員のK・Nが書いた「満洲国の民族」があった。それによると、第三次満洲国年報の統計は次のとおりである。満洲人(中国人)は全人口の97.3%を占め、日本人が僅か2.5%しかなかった。「五族協和」を標榜する「満洲国」の図書館は支配者によって経営され、図書はほとんど日本語のものばかりである。館報を見る限りでは、市民の一員でもある満洲人のために、図書館の対策や工夫について、以下の二号に少し触れた。第25号(1938年9月p58)に

「満人読者雑談会」の纏めに少しだけあった。参加者は国民高等学校の先生と他15名の紳士だということであった。8項目に亘る提案があったが、以後の号（第一巻のすべての号）にはどのように改善され、実行したかについては、見当たらなかった。第31号（1939年3月 p144）の館員よって纏められた「最近満人図書館閲覧傾向」に触れている。

図書館員の人事異動などの公表は日本人館員ばかりであり、筆者が第一巻を確認したところでは、中国人図書館関係者の名前が三回しか（三名）紙面に表すことがなかった。館報を見ても「満人」との交流や、彼等との関わりが少なすぎるとしか言いようがない。当時は占領地域では日本語教育を強制し、各種文献、教育制度などは日本語で行われていることが館報からでも散見する。一国の図書館に中国語の書物が少なすぎるばかりでなく、中国人による文学作品を批評することもごく少ない。少ない中で中国文学者、翻訳家の大内隆雄の活躍は特別に目立つと言えよう。

大内隆雄が「新京図書館月報」に投稿していた時期に新京日々新聞社に勤めており、「満洲浪漫」の同人であった。当時は同人書の『原野』（大内隆雄訳編、三和書房、1939年）で一躍有名になり、名を知られるようになった。

では次に大内隆雄の手になる「満洲国」で活躍していた中国人文人や中国語書籍に関する紹介などを中心に見ていきたい。

第26号（1938年10月）に「支那の書店のことなど」がある。上海を中心に本屋を紹介している。上海の商務印書館、中華書局や現代書店、開明書店の様子を細かく紹介している。なお、有名な内山書店については特別に筆を費やした。そこは日本と中国の文人達が集まる場所として有名である。日本人内山完造が経営していたということで、日中全面戦争の影響をたいして受けず、若者達はこれまで通り出入りしていることを紹介した。

北京東安市場の古本屋などにも触れた。

第40号（1940年4月 p268）に「本屋を覗く」があった。この一編では新京の本屋をはじめ、各地へ出かける際に立ち寄った本屋の様子やエピソードを紹介した。新京の場合は「新刊書を売る店、古本屋、夜店、そして満人の本屋まで、大ていどの店のどの辺にどんな本があるかということを知っている積もりである」と本の通であることが分かる。中国全国まで彼の足跡を残していた。本をこよなく愛する姿が浮かぶ。

大内隆雄は「満洲文壇」で日本と中国両国文人の交流における架け橋の存在で有名である。あまり広く知られていない「満人」文人の活躍ぶりは、大内隆雄の紹介と翻訳を通じて、在満の日本人にも認知されるようになったばかりでなく、翻訳書は日本本土まで（『原野』など）広まり、知られるようになった。

「満洲国」内で活躍していた「満人」作家について、大内隆雄は第32号（1939年4月 p150）に発表された「満人作家・その他」、その2ヶ月後に（35号1939年7月 p187）「〈芸文志〉第1輯について」を、第38号（1940年1月 p225）には「満系の文学回顧」を発表している。

大内隆雄が論じた「満人」文学について筆者は以前論じたことがあるので、ここで少し引用⁽⁶⁾したい。

彼は冒頭に中国文学者古丁の言葉を引用し、「満人作家の悉くが、官吏、会社員、学校教師等の何れかなのであるこの事は満洲文学の幼なさを語る材料として語られがちである。そしてそれも事実には違いない」と古丁の言い分を肯定した。つまり当時の中国人による文学は「働きつつ書く一勤労者の文学である」ということである。大内隆雄はプロの文学者がいない満洲文学の弱みを指摘しながらも、「私は少し違った考え方を持つようになって来た。この職業作家いないということが、満洲文学の一つの強味を示すものとなってもよいではないか。在満日本人の場合にも言えることでもある」と持論を展開している。この理由として、「仕事を持っているが故に彼はこの社会の生産的な面と密接な関係を持続することが出来るのである。彼はその生活をそのためにこそいきいきと描き出し得る筈である」と述べている。

大内隆雄は中国文学者の文学への理解について、「必要なことは彼等の作品を読むことではないか。それこそが満人作家について知る最も正しい道ではないか」と述べ、さらに言葉の壁を越えなければならないことについては、「支那文を解した人は翻訳に頼らねばならない。ところが、そういう翻訳は数少ない。—私は一層奮闘せざるを得ないわけで

(6) 同2、140～141頁。

ある」と自ら中国語による文学作品の翻訳を広める決意を表し、近く東京の三和書房から満人9作家の作品12篇を集めた『原野』を出版することを披露したのであった。

「満人」作家が自分たちの同人誌『芸文志』第1輯を出したときに、大内隆雄がいち早くエールを送った。彼は35号「〈芸文志〉第1輯について」を寄稿し、積極的に評価した。

筆者が別紙において以下のように論じている⁽⁷⁾。

中国語の純文学雑誌『明明』（1936年-1937年）が停刊してから、「満洲文壇」において、中国語の文芸誌はなく、「甚だ寂しさが感ぜられ」たと大内隆雄は当時の状況を振り返っている。このような凋落した状況の下で純粋なる中国人の文芸誌『芸文志』が1939年6月に誕生した。紹介によると、『芸文志』ポスターの文言には「満洲文化の宝庫、新京文芸のサロン」とあり、大内はこのフレーズを「〈芸文志〉の持つ色彩なり、方向なりをうまく表現していると言えよう」と言っている。雑誌『芸文志』に集まる文学者たちは大部分が政府機関に勤めながら、文学に志す熱血青年だった。中でもリーダー的な存在をしているのが古丁だった。彼は「満洲国」内で中国文学者としてもっとも文学の業績が多い一人である。日本語に堪能なため、日本文人との関わりが深く、政府が招集する各会合にもたびたび顔を出し、中国人の中で為政者と日本人と最も近いと言われていた。文芸誌『芸文志』に集まった同人には古丁をはじめ、他に爵青、辛嘉、少虬、孟原、疑遲、非斯、外文などがいる。「満洲文壇」では、『芸文志』同人のことを「芸文志派」と呼んでいる。

大内隆雄文の紹介によると、雑誌の上梓は「〈芸文志〉は不定期刊行物で、芸文志事務会から発行される。芸文に関した創作及び紹介等を掲載することを以て目的としている。（中略）発行の実務は月刊満洲社である」という。雑誌が順調に出版できるのは出版界の大物の支援があるこ

(7) 同2、139～140頁。

とは、月刊満洲社社長の城島舟礼を監理長として、大内隆雄、杉村勇造などが参与していることからわかる。『芸文志』の特質を、大内隆雄は「第一にはそれが全く満人文学者の創意によってはじめられたものである点にあらう。第二には特定の主張などを持たず。ただ文化文芸のために創作し評論し研究するという真摯さのみを共通としている。包括的な、包容力ある刊行物であることである。第三には、この刊行物では、その発行の上に、また内容の上に、日本人側からの協力が行われているという喜ぶべきことである」と纏めている。雑誌を「堂々菊判二百二頁の大冊で、創作、詩、何れも現在の満洲文学の最高水準を示すものであると言える」と絶賛したのだった。

第38号（1940年1月p225）の「満系の文学回顧」では1939年における「満人」文学者による文学の纏めを試みた。当時は中国語字による文学の雑誌に『新青年』と『芸文志』があった。なお、奉天（現在瀋陽）にまもなく『文選』が誕生されることに触れ、「これらには満系作家の殆どが寄稿することになっている」と明言した。

論文の後半に以下の一節が当時の文壇にいて、中国人文人同士の齟齬が感じられる。

いま満系作家は「写印主義」ということを言っている写は書く印は印行するである。とにかく書いて発表することが大事だというのである。この主義によって旺んに書かれつつあるのが現状である。斯うした動きは今後愈よ旺んになって行くであろうと思う。ただ私などから見れば、もっと批判があつてよいのだと思う。批判をすると直ぐ喧嘩になるといふような初期的な段階はもう卒業にしたい。しかし一部に理由もない漫罵的批評が行われているのは事実で甚だ遺憾である。

「上記の「写印主義」とは「芸文志派」の古丁が最初に提唱した創作精神であり、同人たちはほぼこの創作ルールに賛同し、黙々と創作に励んでいた。しかし、この精神に対して、後に形成された『文選』派に集まる同人たちに手厳しく批判され、文壇では盛んに論争が繰り広げられた。大内隆雄はこの

論争を傍観者として「私などから見れば、もっと批判があつてよいのだと思う。批判をすると直ぐ喧嘩になるというような初期的な段階はもう卒業したい。しかし一部に理由もない漫罵的批判が行われているのは事実で甚だ行かんである」と評論したのだった。論争の激しさから、一部は感情的になっていることを暗に批判している⁽⁸⁾と。

2 他の文学者と「満洲文壇」

では他の「新京図書館月報」に寄稿された、「満洲文学」について論じた部分を拾ってみたいと思う。文人と言えば、『作文』同人の投稿が非常に目立っている。他に政府役人や他の図書館に勤務する人物の投稿もあった。

第32号（1939年4月号 p149）に木崎龍が「新京文学以前」を発表した。中に「本屋」、「新聞と雑誌」、「文話会」と、三つのタイトルをつけて、詳しくそれぞれの状況を分析した。筆者は「文話会」に書かれたいくつかの文壇情報に興味がある。「日満」文学者の交流は木崎龍の紹介によると、「4月8日には満洲浪漫の同人と芸文志の同人と、つまり日満作家たちが交歓会をやる筈である」。芸文志派の同人は日本語を堪能な人が多く、交流があったことは不思議ではない。この他に「新京にはいい作家になれるひとが幾らもある」と、期待に寄せていた名前を連ねた。それは、北村謙次郎、町原幸二、今村栄治、逸見猶吉、坂井艶司、矢原礼三郎、大内隆雄、長谷川濬、緑川貢である。ほとんど『作文』同人または『満洲浪漫』のメンバーであることがわかる。

「満洲」の雑誌については、複数の論説がある。木崎龍が上記の論文で触れたが、吉野治夫（新京満日新聞社勤務）が第34号（1939年6月 p171～172）に「満洲の雑誌」を発表した。

彼は論文の中で開口一番に新京の雑誌を「最も大きな弱点は編輯に何等積極的計画的意図が見られないこと、殆ど凡ての雑誌が行き当たりばつたりの編輯に暮している」と批判した。安心して読める雑誌で言えば、満鉄発行した「満鉄調査月報」とか大衆雑誌の「協和を上げた。満支における焦眉の問題を的確に取り上げる雑誌は「満洲評論」であり、非売品の満洲国弘報処か

(8) 同2、138頁。

ら出される「宣撫月報」に優れた資料や論文が多いという。

しかし、総合雑誌にあまりにも問題が多いと指摘した。雑誌名を上げながら、説明をした。「新天地」、「満蒙」、「満洲行政」の三誌はその例である。編輯の意図があるようではあるが、執筆者の貧困、編集者の開発不足、時事問題に対する活発な眼と動きも充分とは思われないと問題点を挙げた。「総合雑誌としては、文化面が甚だ貧弱で創作等にしても貧弱なものばかりが多いのは、執筆者の不心得か或いは編集者の心得が悪いからそうなるのか知らずとにかく缺点となっている」と説明している。純文学として一定のレベルを保っているのが「作文」と「満洲浪漫」を評価した。他に「月刊満洲」、「モダン満洲」、「観光東亜」などにも言及した。

雑誌評論には他に満洲電々編輯部の神戸悌の「機関雑誌に就て」（第36号 1939年8・9月 p197）がある。

彼の紹介では自分の卓上に毎月30種類以上の在満機関雑誌が届けられるということである。これらの雑誌各同人や自分たちの雑誌に閉じ籠もりがちだと指摘した。「在満の機関誌は、総て各自の狭小な殻のなかのみにたて籠るべきであろうか。換言すれば機関誌と云う制限的な観念のうちにのみ自慰的な編輯をつづけてゆくべきであろうか」と疑問を抱きながら、批判した。「満洲国」で日本内地のように雑誌を繁盛させる要素がまだ乏しいことを分析しながら、これをどう打開するかは「在満の各種機関誌は機関のための機関誌と云う保守的な態度から飛び出して、広く一般に開放し、満洲文化昂揚のための一端を担当すべきである」と提案した。

同人誌の代表的な存在である「満洲浪漫」のメンバーで、満洲映画協会に所属している北村謙次郎が第35号（1939年7月 p188）に「満洲浪漫 第三輯について」を寄稿している。同派の創作理念をこのように語っている。「満洲浪漫には満洲浪漫の自覚と意図とがあつて、厳としてその一途は方向づけられている筈であるが、大河を為すためには細流を併せなければならぬごとく、文化面の出来る限り広範囲に亘り、われわれはわれわれのよき協力者を求めようと欲している。健康にして意欲的な僕らの浪漫精神は、時には悪食をもしかねないくらい貪欲であると知ってもらいたい」と。なお、彼等が求めているよき文壇の協力者は彼の文章から「満人」グループの同人誌『芸文志』の同人たちであることがわかる。

『芸文志』については彼は高く評価している。「満人作家のグループから、こんど〈芸文志〉という季刊誌が発刊された高雅清純の香りは、今まで北京にも上海にも見られなかった程度のもので信じられる。同志の同人諸君とは五月中は一度座談会を開いたが、近くまた第二回の会合を催し、大いに談り合う計画である」と『芸文志』同人との親密ぶりを語っていた。

さらに「満洲浪漫」派が重視している問題は「とにかく対満人の問題は、開拓地の問題以上に、僕ら在満作家の大きなテーマである」と述べていた。

大内隆雄が「満人」作家の『原野』を翻訳し、出版されてから多くの反応を読んでいた。とりわけ、新京図書館の館報に載せられたこの一編を見てみたい。日本人の一般的な考え方を表現することができるだろう。満洲鉦発会社図書館に勤務する田端宜貞が第41号（1939年3月p297）に「“原野”について」を寄稿した。彼は『原野』を読む前に「満洲」には文化と称するものが存在していなかったと偏見を持って自ら紹介している。しかし、「これら満人作家諸氏の親しい眼でもって眺められ、取り上げられて文学化された時、始めて人の胸に人間的な感情を燃え立たせ親しみを湧かせる。それは「文学の力だ」。さらに、「満人」作家達は職業を持ちながら、創作活動をしていることに対して、「寧ろ満人そのものの持つ、人間としての優秀さ重厚さによるのではないかと、ひそかに畏れ敬うきもちである」と絶賛している。作風については「それはリアルなこと、軽妙なこと」と述べる。そこから「満人」の本当の生活を見ることができ、「満人の風俗図ともなっている」と評価している。

文芸政策の制限が厳しい中、作家達は常に時局を意識しながら、自分が書いた内容を反芻しなければならない。しかし、田端宜貞は大胆とも思われる考えを披露した。「僕は芸術、又文学は、決して宣伝や、政策に利用されるものであってはならないと思う。それはあくまで作家の忠実な芸術生活、文学生活への沈潜から生まれるべきものであると信じる」と。作品を通じて苦悶する「満人」達の姿を描かれているに対して、論者は自分たちの悩みに似て、親しみを感じるようになり、さらに自分の浅見寡聞を恥じると書いてあった。「満人」作家及び作品に対して、理解と評価を示した一編と言えよう。

終わりに

本論は「新京図書館月報」の復刻版第1巻（1937年8月、12号～1940年6月、42号）を中心に見てきた。1937年は中日全面戦争に突入した、歴史の上では大変重要な一年である。一方、「満洲国」の成立から五年間の歳月が経ち、日本人主導の植民地国家は、国作りの各制度を整えつつあり、特に文化統制の一環として、図書館の建設が急務となってきた。この年の年末に旧満鉄図書館の一部を除き、国の管轄下に置かれるようになった。新京図書館はこのような情勢の下で、また一国の首都の図書館として、「国」の使命を背負いながら、スタートを切ったのであろう。筆者の考察はまさに図書館建設が急ピッチの時期だと言えよう。図書館員の構成から、館報の充実度まで少しずつ改善していき、ハイレベルを目指していたのだと感ぜられる。特に文化や文学に関する評論は時には厳しく、時には揶揄的になり、文壇の先駆的存在である評論家や作家を起用しながら、上手く館報を盛り上げ、レベルアップさせた。特に図書館の様子を記載した雑文は面白かった。何気ない日常のようであったが、あの特殊な時代に人々はどのような気持ちで知識に憧れ、図書館はどのような仕組みで本の貸し出しをし、読者はどのように利用していたのかは、垣間見ることができた。日本人の読者たちは、様々な思いで渡満し、図書館で自分の人生を演じた一コマを披露した。これはすべて図書をこよなく愛したライブラリアン達の眼で確認し、活字を通じて残してくれた。一種のライブラリアン魂のような何かが伝わってきたような気がした。

加藤一夫などが編集した『日本の植民地図書館』では何故植民地に図書館を設置したのか、その理由について以下のように三カ条に纏められている⁽⁹⁾。

第一に、植民政策を推進するのに必要な、その土地の政治・経済・社会・文化・科学技術などの情報資料を集めて、政府や軍が使えるように組織するためである。

第二に、植民地の日本社会で暮らす居留日本人を対象に、学校教育を補ったり、植民政策を周知させるためである。

(9) 同(4)、14頁。

第三に、侵略された国の民衆を日本人化する政策、いわゆる皇民化政策に役立てるためである。

こうした植民地図書館は、本国に存在していた図書館以上に活動は活発で、国内からは国立図書館長クラスの人々が赴任して、図書館経営や整理技術の研究や各種の付帯事業は国内を凌ぐほどの活動を展開していた。

これらのライブラリアンは多くの日本人と同じく新天地の満洲に憧れ、新しい「国家」に幻想を抱きながら、渡満したにちがいがなかった。国策に沿った仕事をこなし、一生懸命に図書館事業に貢献したと言えるだろう。しかし、彼等は遙々日本から満洲に渡って「五族協和」と唱える新国家を目の当たりにしたときに、どのような思いを抱いたのだろうか。「満洲文化」などを論じたり、他の発言から、支配民族の優越感をどっぴり出していた。国家の政策を擁護した彼等はやがて、敗戦を迎える。図書館事業に青春を捧げる思いは志し半ばで挫折してしまう。彼等にとっては「満洲国」とは一体何だったのか。一ライブラリアンとして何を考えたのだろうか。今後は、図書館員による回想に基づく検証をしながら、関係資料の発見に努め、新たな問題を取り上げたいと思う。

(本学教授)

参考文献

- 1 冷綉錦著『“満鉄”図書館研究』、遼寧人民出版社、2011年9月。
- 2 冷綉錦「満鉄的“満洲”経営与附屬地各図書館」、『外国問題研究』2009年第1期。
- 3 李娜 王玉芹「満鉄図書館的職能及其在東北的侵略活動」『日本学論壇』2008年第3期。